

ハマフエフキ中間育成指導

多和田 真周

この事業は栽培漁業技術開発調査の一環として、水産試験場が中心となって実施しているが、ハマフエフキの中間育成部門については国頭村辺土名の辺土名漁港内海面において小割網生簀（ $5 \times 5 \times 3$ m鉄パイプ制）3面を使用し、放流サイズの大きさになるまで国頭漁協が飼育管理について対応した。

経 過

種苗は県営栽培漁業センターで生産された稚魚（平均全長25mm）5.2万尾を、1989年7月3日に栽培漁業センター所有の小型トラックに設置された1.5 t水槽内へ収容して辺土名漁港まで輸送した。輸送回数は3回で、漁港内の海面小割網生簀にそれぞれ2万、2万、1.2万尾を放養、輸送から放養まで約2時間を要した。岸壁から生簀までの輸送方法は水槽がやや傾斜になるように駐車し、水槽下部排水バルブにインチ半のジャバラホースを50m程度取り付け、稚魚が目まわさない程度の水流で、流し込みによる方法によった。その結果、放養後の稚魚は底層に向かって正常遊泳し、ほとんど斃死魚はみられず、輸送歩留りは100%であった。今回の方法は輸送時間の短縮、作業人数の減員、作業の省力化、稚魚の活力低下防止、輸送歩留りの向上が図られ、最良の輸送方法だと思われる。給餌、餌料種類等飼育方法については前年度と同様である。

飼育概要

7月3日から稚魚放流後3日間の状況は、稚魚の摂餌及び活力も良好で斃死魚もほとんどみられない。これまでの中間育成期間中における歩減りは稚魚放養後1週間以内に起きており、それが歩留り低下の要因であったが今回は輸送方法の改善を図ったため、中間育成初期における歩減り効果の成果がみられた。

7月20日 稚魚放流後18日経過、生簀網3mm目から3mm目へ網換えを実施したところNo.1生簀は480尾、No.2生簀は720尾、No.3生簀は100尾の斃死魚を確認した。大量斃死の要因としては網生簀の網目が小さかったため、付着海藻類の繁茂が著しく網目をふさいだことにより、海水交流が悪くなり酸欠状態を起こしたものと考えられ、斃死魚実数は確認尾数を大幅に上回ったものと思われる。平均尾叉長は28.7mmに成長している。

8月22日 稚魚放流後51日経過、網生簀の目詰りが著しく3mm目から5mm目へ網換えを実施したその際に斃死魚尾数を確認No.1は303尾、No.2は151尾、No.3は55尾であった。斃死魚はほとんど骨の状態、共喰い現象がみられた。尾叉長測定では平均39.8mmの結果で、7月20日より11.1mmの伸長がみられたものの、成長が遅い傾向にある。これは、やや餌料不足気味であること、目詰り状態が長く続いたことによる酸欠現象により食欲不振もあったものと考えられる。

9月13日 生簀網を5mm目から5mm目に網換えする。今回も生簀網に海藻類等の付着物が多いものの、若干の海水交流があったものとみられ、前回、前々回のような酸欠現象による大量斃死はみ

られない。成長については尾叉長平均 60.9 mm、体重平均 4.9 g となり、8 月 22 日に比較して尾叉長は 21.2 mm 伸長した。餌料としてマス用配合飼料を投与していたためマダイ用配合飼料に変更する。

10 月 5 日 生簀網を 5 mm 目から 10 mm 目へ網換えする。目詰りがひどいものの斃死魚はなし、尾叉長平均 79.6 mm となり、9 月 13 日に比較して 18.7 mm 伸長している。

10 月 23～24 日 No. 1～3 生簀が育成中のハマフェウキ全尾数を取り揚げ麻酔後、右腹鰭をラジオペンチで抜去し、再び生簀へ放養した。尾数を計数したところ 19,600 尾が生残し、飼育開始時からの歩留りは 37.6% であった。鰭抜き作業は延べ人数 35 名であった。

11 月 7 日 右腹鰭抜去後 2 週間経過したが摂餌状況も良好であり、斃死魚もほとんどみられない。

12 月 18～19 日 辺土名漁港において No. 1～No. 3 生簀それぞれ尾叉長測定後、ハマフェウキ幼魚約 19,000 尾を漁港内へ直接放流を実施した。

今年度の飼育結果は 37.6% の低歩留りとなり、前年度成績の 44.9% を大幅に下回った。初期飼育を良好な歩留りでクリアしたにもかかわらず、低歩留りの要因となったのは飼育管理の不徹底によるもので網換え作業の手抜きが主因と思われる。これは前年度は 2 基の生簀で飼育していたものが今回は 3 基に増設されたこと及びその他にマダイ、ハマフェウキの養殖生簀があり、これだけの飼育管理を担当職員 1 人でやらなければならない、又、別にも業務をかかえていることから、必然的に十分な飼育管理対応が不可能とならざるを得ない。今後の方向性として、受益者負担の原則から漁協職員だけで対応するだけでなく、青壮年部、あるいは組合員全員が参加出来る態勢づくりと中間育成、放流の意義を再度認識してもらうため啓蒙普及の必要性があると思われる。

表-1 月別給餌量

月	給餌量 (kg)
7	46.4
8	58.1
9	101.0
10	84.0
11	124.0
12	75.0
計	488.5

表-2 餌料種類別給餌量

餌料種類	数量 (kg)
マダイ初期 4 号	136.5
ます 3 号	39.5
マダイ成魚用 1 号	245.5
ます 4 号	4.0
ます 6 号	63.0
合 計	488.5